

【論文】

メトロリンガリズムと日本語教育

言語文化の境界線と言語能力

尾辻恵美*

概要

本稿は、オーストラリアの職場における日本人とオーストラリア人の会話を通しての言語・文化・エスニシティ・アイデンティティの構築過程を検証し、その結果をもとに、グローバル社会における言語能力、言語教育のあり方について考察する。特に、モノリンガルの「日本語」を他の言語文化から切り離れた教育ではなく、メトロリンガルとして学習者自身に合った言語環境を構築できる能力を養成する言語教育を提案する。メトロリンガリズムとは固定・規範的な言語文化理解と、またそれを打ち破る動的な理解の相互関係から生まれる言語使用の場であり、メトロリンガルの視野を踏まえた「言語能力」「言語教育理念」がグローバル社会における言語教育に必要であると提唱する。

キーワード

メトロリンガリズム, 多言語・多文化, アイデンティティ, 言語能力

1. はじめに

近年、グローバル化が進む中、「日本人」「日本語」および「日本的」な価値観や行動がより流動的なものになっている。日本語教育においても、個や社会の多様性および流動性を押し殺した本質主義や構造主義に則った言語教育理念に疑問が投げられ始めている（小川，2007；細川，2007b）。Kramersch（2009）は学習者が画一的・体系的に言語システムを習得するという根本理念に基づいている第2言語習得の研究を批判し、言語教育とは血肉や感情を持った学習者がライフヒストリーを背負いながら言語を習得し、多言語話者となるための手助けをすることであると提唱している。つまり、言語学習とは対象言語文化をモノリンガルの視野に基づいて習得・学習することではなく、学習者が多言語（母語+対象言語）話者になることによって、多言語話者としてのアイデンティティを構築することであるとする。しかし、日本

語教育においては、多様性や動性は謳われるようになって来ているものの、未だにモノリンガルの枠内に納まった「日本語」『を』学ぶという風潮が主流である。グローバル化が進み、世界における日本語の位置、日本語話者であるという意味も変わって来ている中、多言語主義的な視野が日本語教育にも必要なのではないと思われる。

Thomson（2010）は教科書や「教室日本語」で提示されている「正しい日本語」がいかに現実から乖離しているか、また何をもって「正しい日本語」とみなすのか問いを投げかけている。さらに、日本語教育は日本で日本人によって使われている日本語を基準にせず、学習者が自分の「第3の場（third space）」を構築し、当人にとって「正当」だと思われる言葉を模索することに焦点を当てるべきであると提唱している。同様に、山田は言語能力観を見直し、「日本語能力は『個』に応じた能力でなくてはならない」（山田，2008，p. 8）と述べ、従来の構造主義的な視野に立脚した普遍性に基づいて日本語能力を測ることに疑問を投げかけてい

* シドニー工科大学 (emi.otsuji@uts.edu.au)

る。また、細川(2009)も、学習者が考える主体として他者と関わる中で、自己表現力を身につける日本語教育の必要性を強く提唱している。つまり、日本語教育が目的とする言語能力というものが、画一的な言語構造システムという範疇を超え、個々人の自己表現や自己実現を促す表現能力であると理解され、自己実現を通してのアイデンティティの構築過程にも目が向けられるようになって来ていると言えよう。これらの研究は規範や固定観念にとらわれた「正しい」「画一的」な日本語の神話から逸脱し、創造性、主体性を重んじているところに新しい展開が見られる。しかし、そのような展開の中でも、日本語という境界線内の議論が主流で、グローバル社会における多言語話者としての日本語教育という観点からの議論はまだ少ない。また、多様性や流動性は固定性や画一性を否定するが、本質主義・構造主義から実際どう逸脱しているかの裏付けの議論も必要かと思われる。つまり、固定性や規範なくして創造性、主体性は語れるのだろうか。ポスト構造主義者である Derrida (1981) は流動性は固定性を否定することにより、その固定性自体を流動性の一部のトレース(痕)として常に含有していると述べている。また、Pennycook (2003), Otsuji & Pennycook (2010, 2011) は言語文化活動は流動性(混成, 創造性, 規範から離れた活動)と固定性(規範性, 画一性, 本質的な活動)の相互関係から生まれるとしている。よって、本質・構造主義を超えた日本語教育、「第3の場」の構築を目的とする日本語教育というものを提唱する際、単に構造主義、本質主義を全般的に否定するのではなく、創造的・動的な「日本語」と固定的な構造・規範との関係や位置づけも必要なのではないか。

本稿は上記の議論を発展させるため、海外での日本語使用に注目し、多言語・多文化を背負った中・上級の日本語話者が言語、文化、国家、エスニシティの狭間でどのような言語活動を行い、アイデンティティや「個」に応じた言語を構築しているかを検討する。オーストラリアの職場における「日本人」と「オーストラリア人」の日常会話を例に挙げ、動的な日本語や言語能力をどう理解し、グローバル社会における日本語教育ではどのような能力を身につけさせることが必要なのかという点を議論する。

2. 言語境界と言語構築

多民族、多言語国家であるオーストラリアにおいて、多様な言語、文化背景を持った者が職場を共にしているのは特別なことではない。当稿では、「日本」および「日本人」を相手とする業務に携わっている在豪の会社で(1)勤務時間中に録音した社員間の自然会話、(2)社員に個別に行った(異)文化、言語使用経験などに関するインタビューとアンケート調査、の2種類のデータを取り扱う。社員(研究参加者)は全員、かなり高度な(中級上から上級レベル)「日本語」「英語」能力を持ち合わせており、日本、オーストラリアの両国での在住経験も豊富であった。自然会話、インタビューはすべて、研究者によって書き起こされ、分析・考察が行われた。収集されたデータは多岐にわたったが(5社における120時間余りの会話データおよび19名の会話参加者とのインタビューデータ)、本稿では6つの会話データを中心に分析結果を考察する¹。

会話1, 2は日本向けのコマーシャルを作る会社(以後ジャバリア)で交わされた会話である。ジャバリアはオーストラリアの主要都市にあり、日系の会社や広告代理店がクライアントである。ジャバリアにはデータ収集の当時6人の社員(日本人3名、アングロ系のオーストラリア人およびニュージーランド人3名)が勤めていた。会話1では社員であるヘザーとあさみがオーストラリアの若者の飲酒問題の新聞記事について話している。会話1(あ:あさみ, H:ヘザー)²

1. H it's possible 今日の新聞にね(それは可能...)
2. あ うん
3. H 中学生 高校生が なんかそういう
いわゆる binge drinking (飲みすぎ)
4. あ ああ
5. H について記事が
6. あ ABC

1 本稿では談話を質的に分析するということで、スペース上6つの会話しか例としてあげていない。他の会話例は Otsuji (2008), Otsuji & Pennycook (2010, 2011) にて議論がなされている。

2 英語発話の和訳は文末に括弧内に記している。

7. H ABC Newspaper. Yeah, Talking about girls drinking 9 drinks in 4 hours and guys more than 10 in 4 hours. (ABC新聞。そう、女の子達が4時間で9杯、そして、男の子たちが4時間で10杯以上飲むっていう話)
8. あ kids do that though (子供たちはそんなことするよね)
9. H I know なんか もったいない(わかる)
10. あ もったいないよ
11. H おいしいお酒だったかもったいない
I think that the only time that I would have drunk that much would be...we had a cocktail party at our place once (私がそのくらい飲んだのって、家でカクテルパーティを前したときだけだと思う)

ヘザーとあさみはかなり頻繁に日本語と英語を混ぜて会話をしていることが分かる。ヘザーは行3では日本語の言葉が出てこなかったという理由から英語に変えたとしても、行1, 9, 11ではそれといった言語のスイッチの理由は見あたらない。また、あさみも同様に英語と日本語を混ぜてヘザーと会話をしている。インタビューでは、言語の選択についてヘザーは「雑談では言語が混沌としている」と述べ、あさみも「ある特定の会話を思い出す時、どの言語で話していたか覚えていないことがしばしばある」とそれぞれ明かしている。またジャパリアの他の社員も「特に英語や日本語を話しているという意識はない。そのときに楽だと思う言葉を選んでいる」、「言葉を選んでいるという意識はない」と述べ、ジャパリアでは頻繁に日本語と英語が混在しているデータが多く見られた。インタビューや会話のデータより、ジャパリアの社員は一見「英語」「日本語」と言語を分別的に捉える意識が薄いように思われた。しかし、その一方、インタビューでは言語を分別的に捉えないと言った本人が、「おとこ おとこの人がフランス語話すとセクシーだし女の子が話すとかわいいと思う フランス人はみんな」という本質的な理解を示す発言を雑談の中でしているのは注目するのに値する。会話2は昼休みに交わされた会話である。

会話2：(な：なおこ、あ：あさみ、R：ロバート、A：アダム)

1. な おとこ おとこの人がフランス語話すとセクシーだし女の子が話すとかわいいと思う フランス人はみんな
2. あ そうかな?あまり 歯みがかないんだよね その人は
3. R は?
4. な 本当それ?
5. A フランス人はおれくさいってきいた
なおこはインタビューでは「自分は日本人ということのを特に意識したことはない。日本人、オーストラリア人と人を区別して認識しない様になった」と述べ、あさみも「日本人はみんなこうだとひっくられるのが嫌だ」と述べたが、その本人が行1や2のような発言をしているのはおもしろい。また、このような複雑な言語使用や言語文化観はジャパリアに限らず、データを収集したすべての会社で多かれ少なかれ見受けられた。教育機関で働いているパトリシアとゆりもその一つの例である。次の会話ではターキーのスタッフィングにお米を入れることについて話している。

会話3 (P：パトリシア、ゆ：ゆり)

1. P it is really annoying (本当に面倒くさい)
2. ゆ ね
3. P oh (まあ)
4. ゆ あいそうだもんね Stuffing for Turkey (ターキーのスタッフィング)
5. P 逆で おもしろいね
6. ゆ after thanks giving(サンクス・ギビングの後)

またパトリシアは会話の後に自分の言語選択について振り返っている場面がしばしばあった。会話4はその例だが、言語を変えた理由についてそのルールやパターンを見出そうとしているが、その時に使用されている言葉自体が英語と日本語が混ざっているのも面白い。つまり、分別的な言語観に基づいた、言語使用パターンを見出そうとしている一方、またそれを否定する言語使用が見られる。

会話4 (P：パトリシア、ゆ：ゆり)

1. P So when I am happy I speak in Japa in English っていうこと?今?(私はうれ

しい時には、には、英語で話すっていうこと?)

2. ユ あ: : そうかな

また別の会話の直後にも同じパターンが見られた。

1. P you just change.. 情熱的になったら日本語になったのよ (今変えたね)

2. ユ あ、そうね

3. P おもしろいね I was speaking in English. I did not start it (私は英語で話していたから、私が始めたんじゃないわよ)

また、ゆりも自分の言葉の選択についてインタビューの時に「パトリアとどっちを使ってもいいということを経験したときに、自分の子供たちがどうしてこういう時には英語の単語、こういうときに日本語の単語を使って、と、自分の気持ちが一番近い言葉を作ってしまったという気持ちがわかるようになった。」と述べている。

上記の会話例は、言語や文化の境界線意識や、境界そのものが複雑であることを示唆しているのではないか。すでに、言語の定義や言語間の境界を流動的に考えるべきであると提唱する研究も出てきている (Heller, 2007; Makoni & Pennycook, 2007)。Makoni & Pennycook (2007, p. 1) は、言語はアプリア (先験的) に存在するシステムではなく、社会的・政治的・歴史的な力関係から生じた慣習・実践行動であると議論を展開している。上記の会話もその意味では、日本、オーストラリアでの社会、文化・歴史的な言語活動および個人の言語文化経験と切り離すことはできない。そのような複雑な構築過程の中で、参加者は単に境界線を否定しているだけではなく、肯定したり、新しい境界線を引きなおしたりしながら、言語文化活動を繰り返していったのではないか。

この境界意識の複雑性を取り上げ Otsuji & Pennycook (2010, 2011) は、混成言語を表わす「マルチ (multi)」、「プリア (pluri)」および「ポリ (poly)」という接頭語は言葉の分別性を前提にしていることより、実際の言語使用形態を表現するには言語イデオロギー的に問題があるとし、「メトロ (metro)」という古代ギリシャ語における meter, 英語で言う mother に相当する何かを生み出す「場: スペース」を接頭語とするメトロリンガリズムを提唱している。また、メトロリンガリズムは「メトロポリス」をも彷彿させる様々な言

語文化が交錯する場でもある。よって、Otsuji & Pennycook によると、メトロリンガルは言語を実践行動としてみなし、固定的・分別的な言語観、そして、また流動的・非分別的な混成言語が相互に作用しながら、「言語」を生み出す場であると定義づけられている。細川 (2010, p. 175) も「混合言語の存在を積極的に認めようとするところから、言語そのものの区分や境界についても考えざるを得ない状況が生まれる」と述べている。

また、上記会話の非日本語話者の参加者はすべて上級レベルの日本語能力を持っているが、幼少時代に日本に数年住んだ経験のあるアダム (会話 2, 5) は、「日本人と電話で話す時は特に、最初に英語を使って、自分が英語話者であると分からせて、日本語で話すようにしている」と述べ、日本語だけでも話せるが、わざと言語を混ぜ、自分の立場を相手と交渉している。また、ジェームズ (会話 5) も年の上下は関係なく、「よっぽどの理由がない限り敬語はあえて使わない」と、自分なりの言語使用を主張している。このような複雑な固定性と、流動性が絡みあっている区分や境界に対する認識下においては、「言語能力」および「(正しい) 日本語」の基準となるものは何かということ再検証する必要があると思われる。Kramsch が言うようにこのような言語使用や能力はモノリンガルの言語観や従来の構造主義に基づいた固定的な言語形態を教えることのみを目的とする日本語教育では限界があると言えよう。

3. 言語とエスニシティの新たな関係

さらに、グローバル化が進む中、従来の言語、文化、エスニシティ、国家間の 1 対 1 の繋がりも弱くなって来ている (Heller, 2011; Luke, 2002; Pennycook, 2003)。それに伴い境界線の複雑化は「エスニシティ (～人であるということ)」「言語文化、規範行動」にも影響を及ぼしている。次の会話もジャバリアで交わされたものであるが、ジェームズ、アダム、ヘザーという会話参加者の誰もが所謂「日本語母語話者」ではない。会話がオーストラリアで行われ、3 人とも英語環境で育ったということを経験に入れると、英語のみで会話が交わされるのが自然であるように思われる。しかし、3 者は「日本語」と「英語」の両言語資源を使用

して会話をしている。

会話5 (J: ジェームス, A: アダム, H: ヘザー)

1. J ふふ: : ワインを 16 本
2. H yeah (え?)
3. A なんて, どこからもらったの?
4. J Ah, I bought them off the internet. There is like a sale, special cellar masters at the moment (ああ, インターネットで買ったんだ。特別なワインセラーのセール今してるから)
5. H う: : ん
6. J offering a 16 bottle dozen (1 ケースを 16 本で売っているよ)

(中略)

7. H Oh 言ってよ
8. J まだあるよ
9. H 本当?

ジェームスは「いろいろな言葉が話せるようになったら, 人を国籍で区別したりしなくなった。」と述べ, ヘザーもいろいろな文化に接した経験から, 「何か意見を述べる時, 国民性に結び付けず『私は』と言うようになった」と述べている。この会話例は自分のエスニシティとも住んでいる国とも関係ない言葉を日常生活の中で, レポートリーとして取り入れている若者の創造的な言語使用の研究 (Jorgensen, 2008; Moller, 2008; Rampton, 2009) に相通じる。それらの研究同様, 会話5の例は従来の言語, 文化, エスニシティ, 国家間の1対1の繋がりが弱くなっていることを示唆していると言えよう。また, 多言語話者になることにより, 様々なアイデンティティ構築の可能性も開かれているのではないだろうか。そこで, 「母語」, 言語の所有権や言語の信憑性 (authenticity) とは何か, という疑問もわいてくる。

次の会話に出てくるオスマンも言語表現を通して, 新しい自分のアイデンティティを模索している例である。トルコ人の母親とアングロ系のオーストラリア人の父親を持つオスマンが「日本語」を話し, 日本文化に触れることで, どうしてもなじめない「トルコ」や「オーストラリア」の文化やエスニシティから距離を置き, 「日本語話者」としての自分のアイデンティティを模索している。オスマンは, 子供の頃から, 自分がどこに属するか分からず, 常に居場所を模索していたと述べた。そのような心の葛藤に苛まされていた15歳のこ

ろからアジア哲学, 文学, 思想の本を読み始め, 次第に「日本的」な考え方に傾倒していったとのことだ。「自分は日本的な考え方が好きで, 死ぬまで日本に住めるっていう気がする。」と何度もインタビューで強調していたことから, 日本に対する思い入れは彼のアイデンティティおよびエスニシティの構築と深く関連しているようだった。データ収集当時, オスマンはワーキングホリデーで在豪中の日本人を対象に様々な情報やサポートを提供する会社 (ブリッジ) に勤めていた。会話6はオスマンと彼の直属の上司であるりえとの間で交わされた雑談である。

会話6 (O: オスマン, り: りえ)

1. O あの12時までには
2. り ん?
3. O 12時まで起きてると何をしているの?
4. り ん?
5. O 12時まで起きてると: : なにするの? りえちゃん。
6. り テレビ
7. O テレビ? ビールのみながら?
8. り 飲まないよ
9. O うそだ 毎日飲んでいるくせに
10. り だいたい日曜日かな

この会話では, オスマンの常体の言語使用だけでなく, 上司であるりえを「りえちゃん」と呼び, また行9においては「毎日飲んでいるくせに」と言語的にも内容的にも規範を超えた言葉を使ったりえをからかっている。しかし, それに対してもりえは「だいたい日曜日かな」と問題視せずに受け入れているようにみられる。オスマンのこのような言語使用に対して, 彼の言語文化能力レベルというものも問われるかもしれない。しかし, 社長や顧客とのやりとりで敬語を使用していることも加味すると, オスマンは時と場合によって言葉を使い分ける能力を持ち合わせていると見受けられる。また彼は豪州の専門学校で日本語コースを主席で卒業したこと, および, 過去日本³, オーストラリア両国においてサービス業で日本語を使用していた経験をもあることから, 彼の言語使用を言語や文化の知識や能力不足と短絡的に結び付け

3 結婚式場の日本人のジェネラルマネージャーに進行役をしないかと声をかけられ, 日本語でホテルの結婚式の進行役の仕事をしていた。

るのには無理があるように思われる。一方、りえ自身も、オスマンとの仕事場における会話について、彼とは雑談がしやすく、「友達としてというか、話しやすかったりする。オスマンは。何でそんなことまで知っているのということまで知っていたりするから」と述べ、雑談のトピックも豊富だとインタビューで答えている。さらに、会話の内容については「いつもけなしあっている。何ですかね?」と、彼との会話に特別問題を感じてはいないようで、ここには両者間での新しい言語使用の相互構築の過程が見られるようだ。この会話からも何を持って言語能力とみなすのかという疑問が出てくる。

前述のオスマンのインタビューより、オスマンは「日本」、「オーストラリア」、「トルコ」的な言語・文化規範などについてある種の本質的な理解をもっており、それらから離れるため「日本」「日本的」行動・思考に対しての何らかの従属欲望をもっていることが伺われた。しかし、その一方、会話6で見られるように、上司に対する言語使用からは、必ずしも「日本的」な規範に完全に同化しているわけではないようである。インタビューでも、日本では間接的にものごとを言ったり、直接上司に文句を言ったりしないことがあるが、彼自身ははっきり思ったことを言うことにしており、それは性格によるものだと思うと述べていた。これは前述のジェームズが敬語をあえて使わないと述べていたのに似ている。つまり、オスマンは日本語話者であることに対して彼なりの本質的な理解を持っている上で、日本語話者になることにより、トルコ人としても、オーストラリア人としても、日本人としてもそれぞれの固定観念を超えた流動的なエスニシティ・言語・アイデンティティの構築を試みているように思われる。ここでも、メトロリンガルのスペースが現存の固定概念を援用したり、受け入れたり、否定したり、応用したりする様々な過程で生まれている。オスマンは様々な言語・文化間を揺れ動きながら、自分の居場所をみつけようと試み、そのため、「日本語」「日本的規範行動」というものを自己実現のため自分なりに調理し、メトロリンガルの実践をしているのではないだろうか。

4. 将来の日本語教育に向けて必要な能力とは？

上記のデータから多言語・多文化を背負った個人による様々な言語使用、言語イデオロギーに基づいた言語使用が窺われた。会話の参加者は英語と日本語を頻繁に混ぜたり(会話1, 3, 4)、英語母語話者間でオーストラリアと言う土地でも日本語も混ぜて話したり(会話5)、エスニシティと言語の新しい繋がりを試みたり(会話6)と、教科書や教室で提示されている「正しい日本語」から乖離しているにも関わらず、仕事や人間関係上では大きく支障をきたしていない。また、彼ら自身の言語使用について、ヘザーはオーストラリアでも人によって、対処のし方は違うと思うし、自分の言語使用は自分の経験と歴史と性格によって規定されていると述べた。つまり、オーストラリアの画一性を否定し、言語活動の複雑さを理解し、自己の言語活動をいろいろな要素を考慮に入れて営んでいる。ジェームズにいたっても、敬語使用に伴う固定的な社会規範を否定し、あえて敬語を使わないことで自分のアイデンティティと人間関係、言語環境を作っていると言える。例えば、上司のおみに対しても常に常体で話していた。つまり、固定性(本質, 規範)と流動性(創造性, 混成)の相互関係の中から、メトロリンガルの特徴を持つ言語活動が営まれていたのではないだろうか。その傾向はオスマンにおいても同様で、日本、オーストラリアに対して固定的な理解を持つてはいるものの、その固定性を援用して創造的な自己の立場を模索していた。

このような複雑なメトロリンガルの言語構築活動を考慮に入れると、山田(2008)が提唱するように言語能力とは何かということの見直しも必要なのかもしれない。また、固定的な「規範」「正確さ」という概念を単に否定するのではなく、その固定性を援用したり、否定したりしながら動的に言語構築する活動を視野に入れた場合、言語教育においてどのような「能力」を養成すべきであろうか。トムソンは日本語学習について、「教科書にあること、先生の言ったことを鵜呑みにせず、ほかの情報源にあたり自分の知見に照らし合わせて検証して、自分なりの『日本』や『日本語』を作って獲得していく」ことであると記している(トムソン, 2009, p. 246)。自分なりの「日本」

や「日本語」を作って獲得していくことが学習だとすれば、このような学習では過去の経験や今の学習過程を通して身に付けた様々な知識や言葉の理解を肯定したり、援用したり、否定したりしながら言語を構築する能力が重要視され、そのような能力は細川(2007a)が述べるように、ある規範を学ぶことを目標とする狭義の「目的主義的」な教育では身につけられないのではないか。しかし、細川のように否定はしなくとも、「目的主義」を広義にとらえ、先験的なある固定地点(対象言語の言語形体、規範的文化行動を学ぶ)に達すると言う目的ではなく、実践を通して構築能力を培う過程を経験するということを「目的」としてもいいのではないか? 「目的」は、単一的、直線的に達するのではなく、本質的、固定的、多義的、流動的な言語や文化理解が交錯する中で自己の立場や言葉やアイデンティティを模索することができる能力を学ぶ過程であってもいいのではないかと思われる。また、細川は「自己変容の発見に出会い、その社会で生きることに自己の立場を明確にする」(2007a, p. 12)ことが言語学習であると述べているが、その理論に則れば、言語教育とは学習者がいかに主体として、自己変容を通して、自分の立場を明確化できる能力を養うことであると考えられる。しかし、どのような言語使用を通して自己の立場を確立するのだろうか? 細川の議論は、自己の立場を確立する個人のバックグラウンドと具体的な言語形態については焦点を当てていない。細川の理論に則ると「日本語」を使って考え、意見を述べ、自分の立場を他者との関係の中で確立するということではあるが、しかしそこで基準となっている「日本語」とは何なのであろうか? それは、当稿で扱われたデータでも示唆されていたように、モノリンガルの日本人が日本で使用する言語ではなく、多言語話者もが所有する言語であり、「母語話者」vs「非母語話者」、「日本語」vs「外国語」という境界線がいろいろな形で交差している接点、もしくは、ある時には境界線すら消滅しているところで使われている「言葉」ではないだろうか? つまり、日本語教育はモノリンガルの固定的な「日本語」から離れ、動的でグローバルな視野が必要で、そのような視点を考慮に入れた言語教育が必要だと思われる。

Kramersch(2006, 2009)とKramersch & Whiteside(2008)は、言語学習者は70年代のように単一の

ナショナル・カルチャーに属しているモノリンガルの母語話者と接することを前提とした言語教育ではなく、学習者も含め、多言語・多文化を背負った多種複雑な価値観を所持している人間同士がコミュニケーションをする場を前提に言語教育に取り組むべきだと述べている。グローバル化の進む中、多言語話者としての言語教育は昔のモノリンガルの言語教育よりも説得力がある。そういう意味では、「日本語」だけを話す能力を養うのが言語能力ではなく、前掲のデータでも示したように、相手と自分が所有する言語資源を交渉しながら、お互いの関係にあった言葉を作っていくのもひとつの言語能力と言えよう。そこには「正しさ」「規範」「母語話者」「非母語話者」という理念では説明できない言語使用の場が生まれてくると思われる。つまり多言語・多文化を背負った人間が言語、文化の境界線を認めたり、否定したり、越えたりするメトロリンガル・メトロカルチュラルな人間になる能力というものも必要になってくるのかもしれない。また、当稿ではKramerschの言葉を援用し、「多言語話者として」の日本語を学ぶという表現を何度も使ったが、前述のメトロリンガリズムの定義を考慮に入れると、日本語、フランス語、英語などという言語が単純に分別的に存在しているという理解では多言語使用・話者を十分に説明できない。つまり、多言語・多文化という言葉を使った時それが実際何を意味しているのかということも、言語教育で考察される必要であろう。多言語、多文化という言葉では表わせきれないところに今後の言語教育の真髄があるのかもしれない。

言語は単にシステムとして先験的に固定的に存在するのではなく、その固定性や境界線を含ながらも常に流動的に変化する社会に向かった思考や世界観や社会実現そのものと言える。そして「自分なりの言葉」、言語環境、アイデンティティも言語文化の交差する空間で構築されていく。それがメトロリンガルな活動であり、そのような場を学習者が作りだす手助けをどうやってするか今後の言語教育の課題ではないだろうか。

細川(2009, p. 35)は言語教育の真髄は「行為者が自らの言語活動によって、他者との協働において、どのようにこの世界における人間関係を構築しつつ、ひとつの社会実現としての自己のありようについて考えていけるか」というところにあるといえるだろう。」と述べている。本稿ではそのよ

うな社会実現とは国家主義的立場が強い近代社会的視野から離れ、グローバルなポスト国家主義的視野にたった、メトロリンガリズム的な社会実現が必要だと提唱したい。

5. おわりに

本稿では因習的なカテゴリーを超えた創造的な言語構築へと向かっている言語活動に注目し、言語教育とはメトロリンガリズム的な世界観を持って行われるべきであると提唱した。この考え方は決して、「日本語」、「日本人」というような境界線や分別性を全く否定しているわけではなく、それらの境界線やその分別性が大きなグローバルな流れの中で時にはあいまいになったり、消滅したり、再構築されたりすることを理解することで、その変容過程で言語や文化や、アイデンティティの新しい意味も構築されるとする。この構築過程においては、様々な言語・文化を背負った人間同士が自分の言語文化資源を使って交渉し、一歩進んで、多言語・多文化からその分割性を越えたメトロリンガリズム的視野を持った社会実現を試みる能力が必要である。そのような視点に立った教育観に則ると、モノリンガリズム的な言語教育観を捨て、従来の日本語教育で当然のように使われていた「母語」「非母語」という観念自体も批判的に捉えられなくてはいけない。さらには、「母語話者」「非母語話者」の接触を前提とした言語教育ではなく、対象言語はその使用の中から生まれるという意識をもって「正しい」日本語という神話から「私たちの日本語」もしくは、「日本語」「英語」という枠をも越えた言語使用をも容認する言語教育が必要となるのかもしれない。細川も復言語・複文化主義を突き詰めれば、言語の境界線は人の数だけであると述べている(細川, 2010)。これは本稿で議論しているメトロリンガリズム的な言語観に通じるところがある。今や言語教育は「言語」「言語能力」とは何かというものに立ち返り、教育理念、教授法を考え直す時代に入っているのかもしれない。

文献

小川貴士 (2007). 主体的なコミュニケーションをどうクラスで実現させるか——文芸批評論のコミュニケーション論との関連から. 小川貴士 (編)『日本語教育のフロンティア——学

習者主体と協働』(pp. 21-36) くろしお出版.
細川英雄 (2007a). 新しい言語教育をめざして——母語・第二言語養育の連携から言語教育実践研究へ. 小川貴士 (編)『日本語教育のフロンティア——学習者主体と協働』(pp. 1-20) くろしお出版.

細川英雄 (2007b). 日本語教育における「学習者主体」と「文化リテラシー」形成の意味. 佐々木倫子, 細川英雄, 砂川裕一, 川上郁夫, 門倉正美, 牲川波都季 (編)『変貌する言語教育——多言語・多文化社会のリテラシーとは何か』(pp. 27-46) くろしお出版.

細川英雄 (2009). 動的で相互構築的な言語教育実践とは何か『社会言語科学』12(1), 32-43.

細川英雄 (2010). 相互文化性の研究指標を求めて——あとがきにかえて. 細川英雄, 西山教行 (編)『複言語・複文化主義とは何か——ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』(pp. 173-177) くろしお出版.

トムソン木下千尋 (2009). 実践を振りかえる. トムソン木下千尋 (編)『学習者主体の日本語教育——オーストラリアの実践研究』(pp. 241-248) ココ出版.

山田泉 (2008). 多文化と日本語教育『日本語教育』139, 1-11.

Coupland, N. (2007). *Style: Language variation and identity*. Cambridge: Cambridge University Press.

Heller, M. (2007). The future of 'bilingualism'. In M. Heller (Ed.), *Bilingualism: A social approach* (pp. 340-345). New York: Palgrave Macmillan.

Heller, M. (2011). *Paths to post-nationalism: A critical ethnography of language and identity*. Oxford: Oxford University Press.

Jorgensen, J. N. (2008). Polylingual languaging around and among children and adolescents. *International Journal of Multilingualism*, 5(3), 161-176.

Kramsch, C. (2006). From communicative competence to symbolic competence. *The Modern Language Journal*, 90(2), 249-252.

Kramsch, C. (2009). *The multilingual subject*. Oxford: Oxford University Press.

- Kramsch, C., & Whiteside, A. (2008). Language ecology in multilingual settings: Towards a theory of symbolic competence. *Applied Linguistics*, 29(4), 645-671.
- Luke, A. (2002). Beyond science and ideology critique: developments in critical discourse analysis. *Annual Review of Applied Linguistics*, 22, 96-110.
- Makoni, S., & Pennycook, A. (2007). *Disinventing and reconstituting languages* (pp. 1-41). Clevedon: Multilingual matters.
- Moller, J. S. (2008). Polylingual performance among Turkish-Danes in late-modern Copenhagen. *International Journal of Multilingualism*, 5(3), 217-236.
- Otsuji, E. (2008). *Performing Transculturation: Between/within 'Japanese' and 'Australian' language, identities and culture*. (Doctoral dissertation). University of Technology, Sydney, Sydney.
- Otsuji, E., & Pennycook, A. (2010). Metrolingualism: Fixity, fluidity and language in flux. *International Journal of Multilingualism*, 7(3), 240-254.
- Otsuji, E., & Pennycook, A. (2011). Social inclusion and metrolingual practices. *Journal of Bilingualism and Bilingual Education*. 14(4), 413-426.
- Pennycook, A. (2003). Global Englishes, Rip Slyme, and performativity. *Journal of Sociolinguistics*, 7(4), 513-533.
- Quist, P., & Jorgensen, J. N. (2007). Crossing-negotiating social boundaries. In P. Auer & L. Wei (Eds.), *Handbook of multilingualism and multilingual communication* (pp. 371-390). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Rampton, B. (2009). Interaction ritual and not just artful performance in crossing and stylization. *Language in Society*, 38, 149-176.
- Thomson, C. K. (2010). Who is to say 'your Japanese is incorrect?': Reflection on 'Correct' Japanese usages by learners of Japanese. *Japanese Studies*, 30(3), 427-441.